



Secure Socket Layer HTTP の設定

- [Secure Socket Layer HTTP に関する情報](#) (1 ページ)
- [Secure Socket Layer HTTP の設定方法](#) (5 ページ)
- [セキュア HTTP サーバおよびクライアントのステータスのモニタリング](#) (12 ページ)
- [Secure Socket Layer HTTP に関するその他の参考資料](#) (12 ページ)
- [Secure Socket Layer HTTP の機能履歴](#) (13 ページ)

Secure Socket Layer HTTP に関する情報

セキュア HTTP サーバおよびクライアントの概要

セキュア HTTP 接続の場合、HTTP サーバが送受信するデータは暗号化されてインターネットに送信されます。SSL 暗号化を伴う HTTP は、Web ブラウザからスイッチを設定するような機能に、セキュアな接続を提供します。シスコが実装するセキュア HTTP サーバおよび HTTP クライアントでは、アプリケーション層の暗号化に SSL バージョン 3.0 を使用します。HTTP over SSL は、HTTPS と省略されます (セキュアな接続の場合、URL が `http://` の代わりに `https://` で始まります)。

セキュア HTTP サーバ (スイッチ) の主な役割は、指定のポート (デフォルトの HTTPS ポートは 443) で HTTPS 要求を待ち受けて、HTTP 1.1 Web サーバへその要求を渡すことです。HTTP 1.1 サーバはその要求を処理して、セキュア HTTP サーバへ応答 (呼び出す) します。セキュア HTTP サーバは HTTP 1.1 サーバの代わりに、元の要求に応えます。

セキュア HTTP クライアント (Web ブラウザ) の主な役割は、Cisco IOS アプリケーション要求に応答して、そのアプリケーションが要求した HTTPS User Agent サービスを実行し、応答を (そのアプリケーションに) 返すことです。

CA のトラストポイント

認証局 (CA) は、要求を認可して参加するネットワーク デバイスに証明書を発行します。これらのサービスは、参加するデバイスに対する中央集散的なセキュリティ キーおよび証明書の管理を提供します。特定の CA サーバはトラストポイントと呼ばれます。

接続が実行されると、HTTPS サーバは、トラストポイントとなる特定の CA から得た X.509v3 の証明書を発行することで、セキュアな接続をクライアントに提供します。クライアント（通常、Web ブラウザ）は、その証明書の認証に必要な公開キーを保有しています。

セキュア HTTP 接続には、CA のトラストポイントを設定することを強く推奨します。HTTPS サーバを実行しているデバイスに CA のトラストポイントが設定されていないと、サーバは自身を認証して必要な RSA のキーのペアを生成します。自身で認証した（自己署名）証明書は適切なセキュリティではないので、接続するクライアントはその証明書が自己証明書であることを通知し、ユーザに接続の選択（確立または拒否）をさせる必要があります。この選択肢は内部ネットワーク トポロジ（テスト用など）に役立ちます。

CA のトラストポイントを設定していないと、セキュア HTTP 接続を有効にした場合、そのセキュア HTTP サーバ（またはクライアント）に対する一時的または永続的な自己署名証明書が自動的に生成されます。

- スイッチにホスト名とドメイン名が設定されていない場合、生成される自己署名証明書は一時的なものです。スイッチを再起動すると、この一時的な自己署名証明書は失われ、新たに自己署名証明書（一時的に）が割り当てられます。
- スイッチにホスト名とドメイン名が設定されている場合、生成される自己署名証明書は永続的なものです。この証明書は、スイッチを再起動しても、セキュア HTTP サーバを無効にしても有効のままです。そのため、再度セキュア HTTP 接続を有効にしたときに使用できます。



Note 認証局およびトラストポイントは、個々のデバイスで設定する必要があります。他のデバイスからコピーすると、それらはスイッチ上で無効になります。

新しい証明書を登録した場合、新しい設定の変更は、サーバが再起動するまで HTTPS サーバに適用されません。CLI を使用するか、または物理的な再起動によって、サーバを再起動できます。サーバを再起動すると、スイッチは新しい証明書の使用を開始します。

自己署名証明書が生成された場合、その情報は **show running-config** 特権 EXEC コマンドで出力できます。自己署名証明書を表示するコマンドの出力（**show running-config** コマンド）を例として一部示します。

```
Device# show running-config

Building configuration...

<output truncated>

crypto pki trustpoint TP-self-signed-3080755072
  enrollment selfsigned
  subject-name cn=IOS-Self-Signed-Certificate-3080755072
  revocation-check none
  rsakeypair TP-self-signed-3080755072
  !
  !
crypto ca certificate chain TP-self-signed-3080755072
  certificate self-signed 01
    3082029F 30820208 A0030201 02020101 300D0609 2A864886 F70D0101 04050030
```

```
59312F30 2D060355 04031326 494F532D 53656C66 2D536967 6E65642D 43657274
69666963 6174652D 33303830 37353530 37323126 30240609 2A864886 F70D0109
02161743 45322D33 3535302D 31332E73 756D6D30 342D3335 3530301E 170D3933
30333031 30303030 35395A17 0D323030 31303130 30303030 305A3059 312F302D
```

<output truncated>

自己署名証明書は、セキュア HTTP サーバを無効にして、**no crypto pki trustpoint**

TP-self-signed-30890755072 グローバル コンフィギュレーション コマンドを入力することで削除できます。その後、セキュア HTTP サーバを再度有効にすると、自己署名証明書が新たに生成されます。



Note *TP self-signed* の後ろに表示されている値は、デバイスのシリアル番号によって異なります。

ip http secure-client-auth コマンド (オプション) を使用すると、HTTPS サーバーがクライアントからの X.509v3 証明書を要求します。クライアントの認証は、サーバー自身の認証よりも高いセキュリティを提供します。



Note Cisco IOS XE Amsterdam 17.3.x 以降、CA の自己署名ルート証明書は、クライアントの認証が成功するように設定する必要があります。

CipherSuite

CipherSuite は暗号化アルゴリズムおよびダイジェストアルゴリズムを指定して、SSL 接続に使用します。HTTPS サーバに接続すると、クライアントの Web ブラウザは、サポート対象の CipherSuite のリストを提供します。その後クライアントとサーバは、両方でサポートされている暗号化アルゴリズムで最適なものをリストから選択してネゴシエートします。たとえば、Netscape Communicator 4.76 は、米国のセキュリティ (RSA 公開キー暗号 MD2、MD5、RC2-CBC、RC4、DES-CBC、および DES-EDE3-CBC) をサポートしています。

最適な暗号化には、128 ビット暗号化をサポートするクライアントブラウザ (Microsoft Internet Explorer バージョン 5.5 以降または Netscape Communicator バージョン 4.76 以降など) が必要です。SSL_RSA_WITH_DES_CBC_SHA CipherSuite は、128 ビット暗号化を提供しないため、他の CipherSuite よりもセキュリティが低くなります。

CipherSuite は、よりセキュリティが高く、複雑になればなるほど、わずかですが処理時間が必要になります。次に、スイッチでサポートされる CipherSuite およびルータの処理負荷 (速さ) による CipherSuite のランク (速い順) を定義します。

1. **SSL_RSA_WITH_DES_CBC_SHA** : メッセージの暗号化に DES-CBC、およびメッセージダイジェストに SHA を使用した RSA のキー交換 (RSA 公開キー暗号化)
2. **SSL_RSA_WITH_NULL_SHA** : メッセージの暗号化に NULL、およびメッセージダイジェストに SHA を使用したキー交換 (SSL 3.0 専用)。

3. `SSL_RSA_WITH_NULL_MD5` : メッセージの暗号化に NULL、およびメッセージダイジェストに MD5 を使用したキー交換 (SSL 3.0 専用)。
4. `SSL_RSA_WITH_RC4_128_MD5` : RC4 128 ビット暗号化、およびメッセージダイジェストに MD5 を使用した RSA のキー交換
5. `SSL_RSA_WITH_RC4_128_SHA` : RC4 128 ビット暗号化、およびメッセージダイジェストに SHA を使用した RSA のキー交換
6. `SSL_RSA_WITH_3DES_EDE_CBC_SHA` : メッセージの暗号化に 3DES と DES-EDE3-CBC、およびメッセージダイジェストに SHA を使用した RSA のキー交換 (RSA 公開キー暗号化)
7. `SSL_RSA_WITH_AES_128_CBC_SHA` : AES 128 ビット暗号化、およびメッセージダイジェストに SHA を使用した RSA のキー交換 (SSL 3.0 専用)。
8. `SSL_RSA_WITH_AES_256_CBC_SHA` : AES 256 ビット暗号化、およびメッセージダイジェストに SHA を使用した RSA のキー交換 (SSL 3.0 専用)。
9. `SSL_RSA_WITH_AES_128_CBC_SHA` : AES 128 ビット暗号化、およびメッセージダイジェストに SHA を使用した RSA のキー交換 (SSL 3.0 専用)。
10. `SSL_RSA_WITH_AES_256_CBC_SHA` : AES 256 ビット暗号化、およびメッセージダイジェストに SHA を使用した RSA のキー交換 (SSL 3.0 専用)。



Note Chrome の最新バージョンは4つの元の暗号スイートをサポートしません。そのため、WebGUI とゲストポータル両方へのアクセスが拒否されます。

(暗号化およびダイジェストアルゴリズムをそれぞれ指定して組み合わせた) RSA は、SSL 接続においてキーの生成および認証の両方に使用されます。これは、CA のトラストポイントが設定されているかどうかにかかわらず。

SSL のデフォルト設定

デフォルトの SSL 設定には次の注意事項が適用されます。

- 標準の HTTP サーバはイネーブルに設定されています。
- SSL はイネーブルに設定されています。
- CA のトラストポイントは設定されていません。
- 自己署名証明書は生成されていません。

SSL の設定時の注意事項

SSL をスイッチ クラスタで使用すると、SSL セッションがクラスタ コマンドで終了します。クラスタ メンバのスイッチは標準の HTTP で動作させる必要があります。

CA のトラストポイントを設定する前に、システムクロックが設定されていることを確認してください。クロックが設定されていないと、不正な日付により証明書が拒否されます。

スイッチスタック内のアクティブスイッチで、SSL セッションが終了します。

Secure Socket Layer HTTP の設定方法

CA のトラストポイントの設定

セキュア HTTP 接続には、CA のトラストポイントを正式に設定することを推奨します。CA のトラストポイントは、自己署名証明書より高いセキュリティがあります。

CA のトラストポイントを設定するには、特権 EXEC モードで次の手順を実行します。

Procedure

	Command or Action	Purpose
ステップ 1	enable Example: Device> enable	特権 EXEC モードを有効にします。 プロンプトが表示されたらパスワードを入力します。
ステップ 2	configure terminal Example: Device# configure terminal	グローバル コンフィギュレーションモードを開始します。
ステップ 3	hostname hostname Example: Device(config)# hostname your_hostname	スイッチのホスト名を指定します（以前ホスト名を設定していない場合のみ必須）。ホスト名はセキュリティキーと証明書に必要です。
ステップ 4	ip domain name domain-name Example: Device(config)# ip domain name your_domain	スイッチの IP ドメイン名を指定します（以前 IP ドメイン名を設定していない場合のみ必須）。IP ドメイン名はセキュリティキーと証明書に必要です。
ステップ 5	crypto key generate rsa Example: Device(config)# crypto key generate rsa	（任意）RSA キーペアを生成します。RSA キーのペアは、スイッチの証明書を手に入れる前に必要です。RSA キーのペアは自動的に生成されます。必要で

	Command or Action	Purpose
		あれば、このコマンドを使用してキーを再生成できます。
ステップ 6	crypto ca trustpoint <i>name</i> Example: Device(config)# crypto ca trustpoint your_trustpoint	CA のトラストポイントにローカルの設定名を指定して、CA トラストポイントコンフィギュレーションモードを開始します。
ステップ 7	enrollment url <i>url</i> Example: Device(ca-trustpoint)# enrollment url http://your_server:80	スイッチによる証明書要求の送信先の URL を指定します。
ステップ 8	enrollment http-proxy <i>host-name</i> <i>port-number</i> Example: Device(ca-trustpoint)# enrollment http-proxy your_host 49	(任意) HTTP プロキシサーバーを経由して CA から証明書を手取るようにスイッチを設定します。 <ul style="list-style-type: none"> • <i>host-name</i> には、CA を取得するために使用するプロキシサーバを指定します。 • <i>port-number</i> には、CA にアクセスするために使用するポート番号を指定します。
ステップ 9	crl query <i>url</i> Example: Device(ca-trustpoint)# crl query ldap://your_host:49	ピアの証明書が取り消されていないかを確認するために、証明書失効リスト (CRL) を要求するようにスイッチを設定します。
ステップ 10	primary <i>name</i> Example: Device(ca-trustpoint)# primary your_trustpoint	(任意) トラストポイントが CA 要求に対してプライマリ (デフォルト) トラストポイントとして使用されるように指定します。 <ul style="list-style-type: none"> • <i>name</i> には、設定したトラストポイントを指定します。
ステップ 11	exit Example: Device(ca-trustpoint)# exit	CA トラストポイントコンフィギュレーションモードを終了し、グローバルコンフィギュレーションモードに戻ります。
ステップ 12	crypto ca authentication <i>name</i> Example: Device(config)# crypto ca authentication your_trustpoint	CA の公開キーを取得して CA を認証します。ステップ 5 で使用した名前と同じものを使用します。

	Command or Action	Purpose
ステップ 13	crypto ca enroll <i>name</i> Example: Device (config) # crypto ca enroll your_trustpoint	指定した CA トラストポイントから証明書を取得します。このコマンドは、各 RSA キーのペアに対して1つの署名入りの証明書を要求します。
ステップ 14	end Example: Device (config) # end	グローバル コンフィギュレーション モードを終了し、特権 EXEC モードに戻ります。

セキュア HTTP サーバの設定

セキュア HTTP サーバを設定するには、特権 EXEC モードで次の手順を実行します。

Before you begin

証明に証明書の認証を使用する場合、前の手順を使用してスイッチの CA トラストポイントを設定してから、HTTP サーバを有効にする必要があります。CA のトラストポイントを設定していない場合、セキュア HTTP サーバを最初に有効にした時点で、自己署名証明書が生成されます。サーバを設定した後、標準およびセキュア HTTP サーバ両方に適用するオプション（パス、適用するアクセスリスト、最大接続数、またはタイムアウトポリシー）を設定できます。

Web ブラウザを使用してセキュア HTTP 接続を確認するには、**https://URL** を入力します（URL は IP アドレス、またはサーバ スイッチのホスト名）。デフォルトポート以外のポートを設定している場合、URL の後ろにポート番号も指定する必要があります。次に例を示します。



Note AES256_SHA2 はサポートされません。

https://209.165.129:1026

または

https://host.domain.com:1026

アクセスリスト（IPv4 ACL のみ）を指定するための従来の **ip http access-class access-list-number** コマンドは廃止予定です。引き続きこのコマンドを使用して、HTTP サーバへのアクセスを許可するアクセスリストを指定できます。2つの新しいコマンドは、IPv4 および IPv6 ACL を指定するためのサポートを有効にするために導入されました。これらは、IPv4 ACL を指定するための **ip http access-class ipv4 access-list-name | access-list-number** と、IPv6 ACL を指定するための **ip http access-class ipv6 access-list-name** です。警告メッセージの受信を防ぐために、新しい CLI の使用をお勧めします。

アクセスリストを指定する際は、次の考慮事項があります。

- 存在しないアクセスリストを指定すると、設定は実行されますが、次の警告メッセージを受信します。

ACL being attached does not exist, please configure it

- **ip http access-class ipv4 access-list-name | access-list-number** または **ip http access-class ipv6 access-list-name** を使用した場合に、アクセスリストがすでに **ip http access-class** を使用して設定されていた場合は、次の警告メッセージが表示されます。

Removing ip http access-class <access-list-number>

ip http access-class access-list-number と **ip http access-class ipv4 access-list-name | access-list-number** は同じ機能を共有しています。コマンドを実行するごとに、その前のコマンドのコンフィギュレーションは上書きされます。2つのコマンドの設定間の次の組み合わせによって、実行コンフィギュレーションへの影響が説明されます。

- **ip http access-class access-list-number** がすでに設定されている場合に、**ip http access-class ipv4 access-list-number** コマンドを使用して設定を行おうとした場合、**ip http access-class access-list-number** の設定は削除され、**ip http access-class ipv4 access-list-number** の設定が実行コンフィギュレーションに追加されます。
- **ip http access-class access-list-number** がすでに設定されている場合に、**ip http access-class ipv4 access-list-name** コマンドを使用して設定を行おうとした場合、**ip http access-class access-list-number** の設定は削除され、**ip http access-class ipv4 access-list-name** の設定が実行コンフィギュレーションに追加されます。
- **ip http access-class ipv4 access-list-number** がすでに設定されている場合に、**ip http access-class access-list-name** を使用して設定を行おうとした場合、**ip http access-class ipv4 access-list-number** の設定は削除され、**ip http access-class access-list-name** の設定が実行コンフィギュレーションに追加されます。
- **ip http access-class ipv4 access-list-name** がすでに設定されている場合に、**ip http access-class access-list-number** を使用して設定を行おうとした場合、**ip http access-class ipv4 access-list-name** の設定は削除され、**ip http access-class access-list-number** の設定が実行コンフィギュレーションに追加されます。

Procedure

	Command or Action	Purpose
ステップ 1	enable Example: Device> enable	特権 EXEC モードを有効にします。 プロンプトが表示されたらパスワードを入力します。
ステップ 2	show ip http server status Example: Device# show ip http server status	(任意) HTTP サーバのステータスを表示して、セキュア HTTP サーバの機能がソフトウェアでサポートされているかどうかを判断します。出力で、次のラインのどちらかを確認してください。 HTTP secure server capability: Present または

	Command or Action	Purpose
		HTTP secure server capability: Not present
ステップ 3	configure terminal Example: Device# <code>configure terminal</code>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 4	ip http secure-server Example: Device(config)# <code>ip http secure-server</code>	HTTPS サーバがディセーブルの場合、イネーブルにします。HTTPS サーバは、デフォルトでイネーブルに設定されています。
ステップ 5	ip http secure-port <i>port-number</i> Example: Device(config)# <code>ip http secure-port 443</code>	(任意) HTTPS サーバに使用するポート番号を指定します。デフォルトのポート番号は 443 です。443 または 1025 ~ 65535 の範囲で指定できます。
ステップ 6	ip http secure-ciphersuite {[3des-ede-cbc-sha] [rc4-128-md5] [rc4-128-sha] [des-cbc-sha]} Example: Device(config)# <code>ip http secure-ciphersuite rc4-128-md5</code>	(任意) HTTPS 接続の暗号化に使用する CipherSuite (暗号化アルゴリズム) を指定します。特定の CipherSuite を指定する理由がなければ、サーバとクライアントが、両方がサポートする CipherSuite でネゴシエートするように設定します。これがデフォルトです。
ステップ 7	ip http secure-client-auth Example: Device(config)# <code>ip http secure-client-auth</code>	(任意) HTTP サーバを設定して、接続処理の間、認証のために、クライアントからの X.509v3 証明書を要求します。デフォルトでは、クライアントがサーバからの証明書を要求する設定になっていますが、サーバはクライアントを認証しないようになっています。
ステップ 8	ip http secure-trustpoint <i>name</i> Example: Device(config)# <code>ip http secure-trustpoint your_trustpoint</code>	X.509v3 セキュリティ証明書の取得およびクライアントの証明書接続の認証に使用する CA のトラストポイントを指定します。 Note このコマンドの使用は、前の手順に従って CA のトラストポイントをすでに設定しているという前提を踏まえて説明しています。
ステップ 9	ip http path <i>path-name</i> Example:	(任意) HTML ファイルのベースとなる HTTP パスを設定します。パスは、

	Command or Action	Purpose
	Device(config)# ip http path /your_server:80	ローカルシステムにある HTTP サーバファイルの場所を指定します（通常、システムのフラッシュメモリを指定します）。
ステップ 10	ip http access-class { ipv4 { <i>access-list-number</i> <i>access-list-name</i> } ipv6 { <i>access-list-name</i> } } Example: Device(config)# ip http access-class ipv4 4	（任意）HTTP サーバへのアクセスの許可に使用するアクセスリストを指定します。
ステップ 11	ip http max-connections <i>value</i> Example: Device(config)# ip http max-connections 4	（任意）HTTP サーバへの同時最大接続数を指定します。値は10以上をすることを推奨します。これは、UIが想定どおりに機能するために必要な値です。
ステップ 12	ip http timeout-policy idle <i>seconds</i> life <i>seconds</i> requests <i>value</i> Example: Device(config)# ip http timeout-policy idle 120 life 240 requests 1	（任意）指定の状況下における、HTTP サーバへの接続最大時間を指定します。 <ul style="list-style-type: none"> • idle : データの受信がないか、応答データが送信できない場合の最大時間。指定できる範囲は1～600秒です。デフォルト値は180秒（3分）です。 • life : 接続を確立している最大時間。指定できる範囲は1～86400秒（24時間）です。デフォルト値は180秒です。 • requests : 永続的な接続で処理される要求の最大数。最大値は86400です。デフォルトは1です。
ステップ 13	end Example: Device(config)# end	グローバル コンフィギュレーションモードを終了し、特権 EXEC モードに戻ります。

セキュア HTTP クライアントの設定

セキュア HTTP クライアントを設定するには、特権 EXEC モードで次の手順を実行します。

Before you begin

標準の HTTP クライアントおよびセキュア HTTP クライアントは常にイネーブルです。証明書の認証にはセキュア HTTP クライアントの証明書が必要です。次の手順では、前の手順で CA のトラストポイントをスイッチに設定していることを前提にしています。CA のトラストポイントが設定されておらず、リモートの HTTPS サーバーがクライアントの認証を要求した場合、セキュア HTTP クライアントへの接続は失敗します。

Procedure

	Command or Action	Purpose
ステップ 1	enable Example: Device> enable	特権 EXEC モードを有効にします。 プロンプトが表示されたらパスワードを入力します。
ステップ 2	configure terminal Example: Device# configure terminal	グローバル コンフィギュレーションモードを開始します。
ステップ 3	ip http client secure-trustpoint name Example: Device(config)# ip http client secure-trustpoint your_trustpoint	(任意) リモートの HTTP サーバがクライアント認証を要求した場合に使用する、CA のトラストポイントを指定します。このコマンドの使用は、前の手順を使用して CA のトラストポイントをすでに設定しているという前提を踏まえて説明しています。クライアント認証が必要な場合、またはプライマリのトラストポイントがすでに設定されている場合は、このコマンドは任意です。
ステップ 4	ip http client secure-ciphersuite {[3des-edc-cbc-sha] [rc4-128-md5] [rc4-128-sha] [des-cbc-sha]} Example: Device(config)# ip http client secure-ciphersuite rc4-128-md5	(任意) HTTPS 接続の暗号化に使用する CipherSuite (暗号化アルゴリズム) を指定します。特定の CipherSuite を指定する理由がなければ、サーバとクライアントが、両方がサポートする CipherSuite でネゴシエートするように設定します。これがデフォルトです。
ステップ 5	end Example: Device(config)# end	グローバル コンフィギュレーションモードを終了し、特権 EXEC モードに戻ります。

セキュア HTTP サーバおよびクライアントのステータスのモニタリング

SSL セキュアサーバおよびクライアントのステータスをモニタするには、次の表の特権 EXEC コマンドを使用します。

表 1: SSL セキュアサーバおよびクライアントのステータスを表示するコマンド

コマンド	目的
<code>show ip http client secure status</code>	セキュア HTTP クライアントの設定を表示します。
<code>show ip http server secure status</code>	セキュア HTTP サーバの設定を表示します。
<code>show running-config</code>	セキュア HTTP 接続に対して生成された自己署名証明書を表示します。

Secure Socket Layer HTTP に関するその他の参考資料

関連資料

関連項目	マニュアルタイトル
証明機関	「Configuring Certification Authority Interoperability」

シスコのテクニカル サポート

説明	リンク
<p>シスコのサポート Web サイトでは、シスコの製品やテクノロジーに関するトラブルシューティングにお役立ていただけるように、マニュアルやツールをはじめとする豊富なオンラインリソースを提供しています。</p> <p>お使いの製品のセキュリティ情報や技術情報を入手するために、Cisco Notification Service (Field Notice からアクセス)、Cisco Technical Services Newsletter、Really Simple Syndication (RSS) フィードなどの各種サービスに加入できます。</p> <p>シスコのサポート Web サイトのツールにアクセスする際は、Cisco.com のユーザ ID およびパスワードが必要です。</p>	http://www.cisco.com/support

Secure Socket Layer HTTP の機能履歴

次の表に、このモジュールで説明する機能のリリースおよび関連情報を示します。

これらの機能は、特に明記されていない限り、導入されたリリース以降のすべてのリリースで使用できます。

リリース	機能	機能情報
Cisco IOS XE Everest 16.5.1a	Secure Socket Layer HTTP	シスコが実装するセキュア HTTP サーバおよび HTTP クライアントでは、アプリケーション層の暗号化に SSL バージョン 3.0 を使用します。セキュア HTTP 接続の場合、HTTP サーバが送受信するデータは暗号化されてインターネットに送信されます。

Cisco Feature Navigator を使用すると、プラットフォームおよびソフトウェアイメージのサポート情報を検索できます。Cisco Feature Navigator には、<http://www.cisco.com/go/cfn> [英語] からアクセスします。

翻訳について

このドキュメントは、米国シスコ発行ドキュメントの参考和訳です。リンク情報につきましては、日本語版掲載時点で、英語版にアップデートがあり、リンク先のページが移動/変更されている場合がありますことをご了承ください。あくまでも参考和訳となりますので、正式な内容については米国サイトのドキュメントを参照ください。